

<大会校企画シンポジウム「アフターコロナに向けた高大接続教育—持続可能なプログラム形成に向けて—」>

趣旨説明

小西英行
多摩大学

今回の大会校企画シンポジウムは、多摩大学(高大接続AL研究会)との共催として実施します。多摩大学の高大接続AL研究会は、2017年より、附属系列の多摩大学目黒中学高等学校・多摩大学聖ヶ丘中学高等学校と連携し、無理なく・無駄なく・持続可能なプログラムの開発・実施を行ってきました。基本方針としては、新しく特別なものとして始めるのではなく、大学や高等学校で既に実施されているプログラムに、相互にただ乗りすることから始め、その後、大学や高等学校でそれぞれ新たに計画される教育プログラムの開発段階で、相互に協力しながらそれを進めるというものです。具体的には、第1段階として大学のプログラムに中学高等学校生が参加することから始め、第2段階として中学高等学校のプログラムに大学生が参加し連携を深めました。その後、第3段階として現在は、高等学校の新たな探究プログラムの開発に大学が、大学の新しい教育プログラムに高等学校が参加を予定しています。この連携のプロセスを中心に、多摩大学聖ヶ丘中学高等学校の出岡由宇先生に、事例報告頂きます。

一方で、こうした大学と附属系列の中学高等学校などでの連携で先進的な事例として、湘南工科大学学長の本枝暢夫先生に、事例報告頂きます。湘南工科大学では、附属高等学校からの入学が1桁であったものが、現在では100人を超えるといえます。具体的には、高大7年一貫教育を謳ったプログラムの開発や、そのプロセスから、貴重なお話をお伺いできるものと承知しております。

また、地域の公立私立の高等学校との高大接続プログラムを多数実施している先進事例として、共愛学園前橋国際大学学長の大森昭生先生にご報告頂きます。大森先生からは、地元の高等学校から相次いで高大接続の打診を受けている状況に対し、大学での教育改革の必要性について、貴重なお話をお伺いできるものと承知しております。

さらに、こうした高大接続プログラムが、コロナ禍においてどのように継続実施してきたのか、事例報告を通して学び、アフターコロナに向けた持続可能な高大接続プログラムについて検討したいと思います。